

瀧野 喜市

北海道健誠社グループ代表



全国、全道から議員や経営者団体が相次いで東神楽工場を訪れている。お目あてはバイオオマスボイラー。CO2の排出量抑制の必要性が叫ばれるなか、いち早く稼働させた省エネルギー型の新工場に、著名な経営コンサルタントも太鼓判を押す。

社員約200人のうち3分の1近くを障がい者が占める。直接雇用の27人は法定の最低賃金に達している。障がい者の多くが最低賃金制度から除外されている実情を考えれば画期的だ。グループ内で福祉サービス事業所『ケンセイチャレバレッジ』も運営し、将来的に就職を目指している障がい者が37名登録し、工場で就労している。

「我が社にとって不可欠な戦力。障がい者の雇用が当たり前の世の中になつてほしいですね」と願う。

この春、高校新卒者を含め15名を新規採用するのも社会貢献の一環。若き人材は13店舗体制に拡大するクリーニング店チェーン「ランドリーム」に配属される予定だ。

たぎの きいち

1941年旭川生まれ。常盤中学校卒。菓子職人、ミシンのセールスマン、ホテル経営などを経て92年に北海道健誠社を設立。他に関連会社2社の社長も兼務。2001年障がい者雇用優良事業所に認定。02年、道知事より北海道社会貢献賞を受賞。09年1月21日、日刊工業新聞社「地域社会貢献者賞」受賞。

「すてきな笑顔と花のまち」東神楽町に今年5月に、共生型住宅がオープンする。障がい者や高齢者がともに暮らす新しいタイプの住まいだ。

障がい者は障がい者、高齢者は高齢者、あまり接点がない状態でそれぞれの幸せを考えるのが当たり前のことだと、少し前までは考えられていた。そんな考え方と根本的に異なるのが、障がい者、高齢者などが共に暮らす「共生」という概念だ。

1月9日に東神楽町北2条西3丁目で着工した「ひがしかぐらふらわーはうす」は、介護が利用できる「共生型住宅」。厚生労働省の共生型基盤整備事業として、北海道健誠社グループの特定非営利活動法人まこと（瀧野京子理事長）が建設する。住宅内での一人暮らしを基本として、高齢者

ひがしかぐらふらわーはうす、5月完成 高齢者と障がい者が ともに生きる住まい 交流館も着工、地域とのきずな深める

活できる場がないなどの「地域間格差」の問題があり、共生型事業が展開されればより地域に密着したサービスの利用が可能になる。

ふらわーはうす完成後には障がい者や高齢者、合計18人が地域の住民と一緒に暮らす。施設内はもちろんバリアフリー設計で、やわらかく室内を照らす間接照明や、レストランのようなダイニングルームなど、くつろぎのある生活ができるような工夫がこらされている。

まことでは、障がい者の居宅介護事業所の他に、高齢者の訪問介護事業所も開設することで、ふらわーはうすを利用して障がい者や高齢者に24時間スタッフが勤務し、福祉サービスを提供する。また、管理栄養士が、健康状態やニーズにあったメニュー構成で食

事を提供する。

ふらわーはうすの部屋はタイプA・Cの3種類。家賃、水道光熱費、管理費、食費の合計額は1人、1カ月あたり8万4000円から9万円となっている（福祉サービスを受ければ、別途自己負担が発生する）。非課税世帯の人も利用が可能だ。

まことでは「従来の枠にとらわれず、家庭に近いケアをさせていた

ます」と説明している。

このほか、まことでは同じ厚生労働省の共生型基盤整備事業として「ひがしかぐら交流館」（仮称）も建設する。近く工事を開始し、今年7月のオープンを目指している。

交流館内には北海道健誠社のホームクリーニング「ランドリーム東神楽店」も開店し、障がい者の就労の場として提供するほか、地域活動支援センターや相談支援事業所、地域の高齢者サークルの活動の場としての利用も行う。又、敷地内のバイオマスボイラーの蒸気を利用して温浴施設などが設けられる予定。



従来の施設と二線を画す
モダンな外観も特長

「ひがしかぐらふらわーはうす」「ひがしかぐら交流館」についての問い合わせは特定非営利活動法人まこと（電話0166・83・4644）まで。

障がい者や高齢者がともに暮らす新しいタイプの住まい「ひがしかぐらふらわーはうす」（東神楽町北1条西2丁目）がこの5月にオープンする。現在、入居を希望する人からの申し込みを受け付中。「すてきな笑顔と花のまち」東神楽町にふさわしい、あたたかな空間となりそうだ。

これからのコミュニティを語るうえでキーワードとなりそうなのが「共生」。長い間、障がい者と高齢者、障がい者と健常者の間にはあまり接点がなく、それぞれ別の空間で幸せを考えるのが当たり前のことだと、少し前までは考えられていた。いまでは空間を共有しつつ、共に暮らすことが皆にとつての幸せなのではないかとの考えが広がりがつつある。「共生」という考えに

ひがしかぐらふらわーはうす、5月完成 高齢者と障がい者が ともに生きる住まい 交流館には温浴施設 入居申し込み受け付け中

沿って、北海道健誠社グループの特定非営利活動法人まこと（瀧野京子理事長）が今年1月から工事を進めていた「ひがしかぐらふらわーはうす」が5月にオープンする。

厚生労働省の共生型基盤整備事業として、住宅内での一人暮らしを基本とし、高齢者の訪問介護と同時に、障がい者の方にも居宅サービスも行うという、これまでは別々だった枠を飛び越える先進的なとりくみであり、福祉関係者の注目を集めている。

完成後には障がい者や高齢者、合計18人が地域の住民として一緒に暮らす予定。ふらわーはうす内には1年365日、1日24時間体制で信頼できるスタッフが常駐し、管理栄養士が作成する食事メニューに沿って、健やかで楽しい生活を支える。

このほかまことでは、障がい者の居宅介護事業所の他に、高齢者の訪問介護事業所も開設すること、ふらわーはうすを利用して障がい者や高齢者に24時間体制の福祉

サービスを提供する。「従来の枠にとらわれず、家庭に近いケアをさせていただきます」とスタッフは語る。

間取りにも工夫をくらし、小規模でアットホームな暮らしを実現しながら、入居者ひとりひとりのプライバシーにも配慮している。周囲とのちょうどいい距離が保てる空間が、そこにある。

施設内はもちろんバリアフリー設計で、やわらかく室内を照らす間接照明や、レストランのようなダイニングルームなど、くつろぎのための工夫がいっぱい。

ふらわーはうすの部屋は面積に応じてタイプA（Cの3種類。家賃、水道光熱費、管理費、食費の合計額は1人、1ヵ月あたり8万4000円から9万円となっている）福祉サービスを受ければ、別途自己負担が発生す

る。非課税世帯の方も利用が可能だ。道内においても障がい者が、地域で働く場や生活できる場がないなどの

「地域間格差」の問題があり、共生型事業が展開されればより地域に密着したサービスの利用が可能になる。

このほか、まことでは同じ厚生労働省の共生型基盤整備事業として「ひがしかぐら交流館」（仮称）を建設中で、8月のオープンを目指している。交流館内には北海道健誠社のホームクリーニング「ランドリーム東神楽店」も開店し、障がい者に就労機会を提供するほか、地域活動支援センターや相談支援事業所、地域の高齢者サークルの活動の場としての利用も行う。又、敷地内のバイオマスボイラーの蒸気を利用して温浴施設などが設けられる

予定だ。